山賊

搦置ければ、われに食炊きて出せとせむるまゝ、是非なくとゝのへ居るなり、盜人五六人は藏へ往て有と語りければ、鐵砲に玉藥火繩そへて、ひそかに給れ、食を出す時、かれらが並よく一列にならぶやうに膳をすへたまへといふ、その如く膳をならべし程に、盜人等一列にならび、食なかば頃、窓より鐵砲をさし入、よくねらひてはなしけるに、五人を搏倒しぬ、殘りのものおどろきさわぎ、遁げちりけれども、五人の死骸をもつて吟味ありければ、ことゞくさがし出され、國君より刑罰せられ、その子は士となして遣はれけるとぞ、松山より出たる九十餘の男が、むかし物語りにしける、おもふに延寶年中の事やらん、

〔窓の須佐美三〕芝の大佛の住持如來寺は、寢間近く、士と見へて、五七人山をつたひ下りて押込なん氣色なり、差掛りの事にて、住持の甥やらん、十五六ばかりなる角前髮の少年、寢て居りしが、聞付て、身繕ひして、向ひ、やゝしばらく戰ふ所に、住持は次の間にありて、隨分働くべし、爰に鎗を提て居るなれば、手づよくはわれ出て突ふせんと高聲に呼ぶ中に、少年よく働きて、一人に手を負せければ、山へかけのぼりて、引取けるとぞ聞へし、元祿のはじめのころにやありけん、

〔下學集上人倫〕山賊（サンダウ）日本世話、山盜人云也、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕盜人○中略

山賊（ダチ）　每竄居山野、夜出奪往來之貨、或剝取衣服、名之山賊、夜末太知　又謂逐剝（ライハギ）、

〔兼盛集〕旅人いくあひだに、ぬす人あひたり、

旅人はすりもはたごもむなしきをはやくいましね山のとねたち

〔古今著聞集十二偷盜〕かゝる程に、大明神の御詫宣に、我國第一の能說をきかん事を悅思ふに、いかにかくさまたげをばなすぞと、云めしたまひければ、恐をなして、本議にまかせて請じ下してけり、誠に富樓那の辨說をはきて、衆人感涙を垂ぬはなかりけり、隨喜のあまり南都こぞりて、われも